

昭和の南海地震体験談

氏名: 杉山 百合子(すぎやま ゆりこ)
生年月日: 昭和5年2月5日
地震を体験した場所: 日高町・自宅寝室
当時の家族状況: 父、母、兄弟姉妹8人



1) 地震発生時の状況

当時16歳で、自宅寝室で就寝中、揺れを感じて目を覚ました。揺れが収まるまで布団の中で横になったままだった。大きく揺れ、割と長い時間続いたが、物が壊れたり、落ちたりした様子はなかった。揺れが収まってから着替えたが、まだ朝早く暗い時間だったので、もう一度眠ってしまった。

2) 津波襲来時の状況

暫くすると外から「津波来るぞー！」と叫んでくれている男性の声が聞こえた。飛び起きて家族と避難しようと玄関を降りると、もうすでに潮が庭に入ってきていた。足のくるぶしまで濡れた。自宅前の道をひとつ上がると、もう高台だった。慌てていた事もあり、何も持たずに避難した。

高台の場所からは海がはっきり見えた。船の燃料を入れたドラム缶が海沿いの道路に大量に積んであったのだが、潮が来る毎にあちこちに流されていった。潮の流れがあったのかどうかは判らないが、前後左右に動き、ぶつかりながら速いスピードで流れていた。海水は見る見る増え、波止が沈み、何もかもが埋まってしまい、一面が海になり、また引いていく、ということを繰り返していた。4回ぐらい津波が来たと思う。大きな地震があれば津波が来るという話は聞いて知ってはいたが、「まさか」という気持ちだった。後で聞いた話だが、避難が遅れ、道路が潮で通れなかった為、屋根伝いに逃げた人がいた。

3) 家族の行動・被害

家族は全員無事だった。夜が明け、ずいぶん明るくなってから、7時頃に自宅に戻った。比較的高い土地で、海から直接水が来る事はない場所だったが、道路をまわり込んで、少し低くなっていた庭に潮が流れ込んだようで、床下浸水の跡があった。以前から生活水を溜めておく大きなつぼを埋め込んで使用していたが、どんな力がかかったのか、上に浮き上がってひっくり返っていた。

4) 集落・周囲の被害

男児1名と男性1名が亡くなった。男児は父親に抱かれ避難したが、引き潮に引かれ、流さ

れて亡くなった。男性は会社の役員か何かをされていて、事務所に書類を取りに行き、避難が遅れたようだ。土地が低い地域では床上90cm程度の浸水があったようだ。一部地域にはドラム缶が家屋の中まで流れ込んで来た、という家もあったそうだ。

5) 地震・津波後の生活

片付けで何かと大変だったと思うのだが、よく覚えていない。水には不自由したが、食べ物については困ったという記憶は無い。余震が何ヶ月も続き、恐ろしい思いをしたが、青年団が来てくれたので嬉しかった。外出した時、家財道具を洗っている人をよく見かけた。

6) 次の災害への備え

避難訓練に参加しているが、体調に不安があることを家族には話している。頑丈な避難所が欲しいと思う。家庭では1階用と2階用に分けて持ち出し袋を作り、それぞれ食料品や懐中電灯を入れて常備している。津波が来た時を想定して、書類は2階で保管するようにし、2階部分でしばらく生活ができるよう準備している。厚手の靴下や靴は寝室周りに置いている。